

『子どもの世間』

斎藤茂男編

——二人の斎藤さん——

篠塚 英子

斎藤茂男さんから去年の暮れに新刊本のご寄贈をいただいた。後でお礼状を、と思いながら積んでおき失念してしまい、年賀状の時、突然思い出し慌てて遅い礼状を付記した。その本を紹介したい。

斎藤さんとはルポルタージュ『妻たちの思秋

記』以来のファンで、私自身が仲間とやっていたミニコミ誌では非インタビューをしたいと願い、実現し、それ以来、交流が続いている。経済優先の諸問題が一番繊細な人たちに現れるという重いテーマを扱っている斎藤さんの仕事からは、経済学を専門とする私は、いつも触発されるが、今回

は子どもが対象である。

本書は九人の専門家がそれぞれの立場から子どもが置かれている現状についてまとめている。編者の斎藤氏は全体を総論的に論じているが、次の簡潔な既述がそのすべてが言い尽くしている。

「六〇年代の経済政策に起因する偏差値競争の体制が実現するのは七〇年代中頃。全国の中学三年生が正規の授業時間中に、業者がつくる英数国社理五教科のテストの結果を進路決定に利用する中学は四七都道府県すべてに及んだ。こうして偏差値で子どもを選別する輪切りの装置が完備した。非行、校内暴力、登校拒否、いじめと連続する子どもの反抗シグナルは、こうしてつくられた競争システムへの破壊衝動が根源にあるからこそ、いまもなりやまないわけである」。

こうして斎藤さんは子どもたちの現場を歩き回り生の声を拾い集める。例えば中学一年担当の教

師の声。年々、これは正しい、間違っているとほっきりものを言う子どもは、多数派の他の子どもから反発をかうという。「中学で始めて顔を会わせたばかりの子どもの中で、素直に、正當に自己主張した子は、そういう反応に出会って黙ってしまう。周囲の様子をうかがい表に出ようとしないくなる。こうしてリーダーになろうとする子は年々いなくなる」。大学でも年々、リーダーになろうとする学生はいなくなっていると、はたと気づく。

こうして、子どもの現象はいじめへと進む。「いじめに象徴されている子どもの心的状態を考えていくと、これは戦後の日本の決算書だ、という想いが深まる。…いじめ現象で子どもが演じる数々の表現は、生産現場で大人たちが共有してきた価値観そのままの写し絵だとわかる。個の多様性を否定して組織への順応性を優先させる論理

は、すべての生産現場で大人たちが信奉して疑わなかったスローガンだ」。

その大人たちがいまにげの準備にかかっている。「一番大事なのは家族です」「なにしろ、これからは共生の時代ですから」と。だがその家族こそくせ者ですよ、と本書に登場する九人の中の、もう一人の齋藤さん、齋藤学氏は待ったをかける。

こちらの齋藤さんとは一度だけシンポジウムで一緒した。その時、専門の精神医学の情報の豊富なのが当然としても、人間的に強烈に引き付けられるものがあつた。お会いした当時は東京都の研究所の研究員であつたが、個人的にさまざまな臨床的な相談をおこなつており、そこからの知見をもとに構築する独自の齋藤理論は本当に独創的で強烈な衝撃を受け、一度でファンになった。以降は齋藤さんの書かれた本を買い求め、また新刊は献本の幸運を得た。その後、齋藤さんは東京都

を辞めて、家族機能研究所を作りその所長になつた。子どもの虐待防止センター代表も務める。その行動力には本当の敬服する。いただいた『アドルト・チルドレンと家族』（学陽書房、一九九六年）から、私は新しい家族関係論を触発され、大切に本箱に収まつている。

二人の齋藤さんが出会つたのは、齋藤茂男氏が齋藤学氏に取材をしたのがきっかけという。いざれにしても二人の齋藤さんにこの一冊の本で出会うのはファン冥利につきる。

本書では「家庭内暴力にみる共依存社会の病理」という題で、齋藤茂男氏が齋藤学氏に聞き書きする形をとっている。齋藤学氏のキチンと書かれたものを期待する読者には是非前述の本を手にとることを勧めたい。

齋藤学氏の家族関係を理解するために、是非知っておく必要がある精神医学の専門用語が、共

「基本のところでは、他人に尽くして、他人からもよくしてもらおう」という、他人が自分を受け入れてくれることによって、ようやく自分が自分を許せるといったらいいのでしょうか、そういうとらわれかたをして暮らしている」。まさに共依存システムである。

では、子どもの問題に限って、子どもにこの関係から抜け出すためにはどうしたらよいのか。

「一つは勝ち負けの土俵を無数につくって、選択肢をうんと多くすることですね。…たとえばセクシャリティについても固定観念を捨てることだし、家族の形態にしても多様に選択の幅を広げていくことだと想いますね。」

ということとは、結婚や家族の形態にも柔軟な発想が求められるということである。

「大体、家族というものは子育てのためにあるのであって、人間の子育てに一五年も一六年もかか

るから永続性があるだけの話で、子育てと自分たち夫婦の愛を維持するなんてことは全く別次元のことです。場合によっては夫婦なんてやってない方が愛は確かなものになるわけですね。家族はいずれ子どもが大きくなって親の保護を必要としなくなれば、子どもは出て行くし、いずれ最終的にはなくなってしまうものですから、あまり、家族、家族と重たく考えない方がいいんです」

この考えを初めて聞いた時、私も実はショックを受けたが、いまではすっかり斎藤論に賛同である。

さて『幼児の教育』の読者の方はどのように感じられるであろう。是非、二人の斎藤さんの書物にあたって自分の頭で考えて欲しいと思い、ここに紹介させていただいた。

(お茶の水女子大学)